

カンボジア通信

第11号 2013年2月6日発行

河合塾グループ カンボジア教育支援活動 **河合塾**
cam@kawai-juku.ac.jp



カンボジア教育支援活動12年目

~もっと知ろう!カンボジア~

河合塾による教育支援活動

カンボジア文化交流会を実施しました☆



去る10月6日(土)大阪校、10月7日(日)福岡校で「カンボジア文化交流会」を開催しました。本年度のゲストは Kem Khemara (カム・ケムラ) さん。

交流会は「第1部:カンボジアの歴史・文化と支援活動について」、「第2部:ケムラさん講演会」と進行しました。ケムラさんからの「日本人が抱くカンボジアのイメージって何ですか?」という質問を参加者に投げかけ、参加者から「地雷」「危険」「怖い」「発展途上」などというネガティブなイメージが返ってくるからスタート。さらに、経営する「美・ネイル」の立ち上げから現在までのエピソードを、大変ユニークな語りに乗せて、文化的にも大変に魅力的なカンボジアの側面を教えていただきました。

それでもまだカンボジアは厳しい社会事情があり、「プノンペン市内で収入がある程度安定している職に就くには、3ヶ国語を話せないといけない。クメール(カンボジア)語、英語とあと1つは出来ないといけない」というお話をいただきました。これには参加した多くの生徒たちの後のアンケートで分かるように「英語をもっとしっかりやらな」と自覚したようでした。

福岡校会場ではケムラさんの知人で北九州市水道局の方が来られ、プノンペンの水道開発に多大なる貢献をさせていただいた経緯を急遽お話しいただきました。今ではプノンペン市内の上水道は蛇口から日本の水質基準をクリアした上質な水が出るようになってきているようで、なかなか耳にすることのない話に参加者はみな驚いていました。現在のプノンペンの写真を見ながら、「明るい」「安全」「開発がどんどん進んでいる」などの全く逆のイメージを参加者に持っていたことができました。

Kem Khemara (カム・ケムラ) 氏: カンボジアの首都・プノンペンでネイルサロン「美・ネイル」を経営している26歳。この他、日本の「新エネルギー・産業技術総合開発機構」プノンペン事務所でローカルコンサルタントの仕事にも従事。中学生の頃から日本語の勉強を始め、高校時代に大阪府立佐野高校国際科に1年間留学経験もあり、日本語が堪能。4ヶ国語話せる。



カム・ケムラ氏

日本人が抱くカンボジアのイメージって、何ですか?

10月20日(土)新宿校にて、フリーカメラマン 佐々木健二氏をお招きして、エンリッチ講座を実施しました。佐々木氏が撮影したカンボジアのゴミ山に住まざるを得ない子どもたちが、苛酷な環境の中でも活き活きと暮らしている写真を投影しながら、子どもたちの様子や現地でのエピソード、カンボジアへの思い等を語っていただきました。

今回はカンボジアの「貧困」がテーマであったこともあり、参加者には、NGO活動や国際支援(医療)、環境問題に関心のある人、また海外生活に興味のある人や、経験者(帰国子女)が多く、質問内容やアンケート回答でも、意識の高い声が多く見られました。



自身の撮影した写真をもとに講演をする佐々木健二氏

カンボジアの写真を映写しながらの講演となりましたが、厳しい現実を表現するには言葉でなく写真の方がかえって雄弁であったこと、また「貧困」と「子ども達の目」という陰陽がバランスとなり、参加者の満足度・納得感にもつながったことが、アンケートからも感じられました。現在のカンボジアを語る上で、「貧困」と「発展」はどちらも現実です。貧困の現実を正面から伝えることで、参加生徒には「世界や歴史に目を向ける重要性」、「自分はどうあるべきか」、「何が出来るか」、を深く考えさせるきっかけになったことでしょう。

佐々木健二(ささき けんじ)氏: 1966年 東京都八王子市生まれ。私立八王子高校卒 東京写真専門学校中退。写真スタジオ勤務、学校の卒業アルバムなどの撮影を行う。現在はフリーランスとして活躍する傍ら、毎年、カンボジアに赴き、子ども達の写真を撮り続ける。カンボジアの歴史・文化・情勢にも詳しい。著書に「カンボジア ゴミ山に生きる子どもたち」(2011年11月/デジプロ)がある。

カンボジア教育支援活動は単にモノを支援するだけでなく、双方が互いに発信し、刺激し合える有機的な活動になるように心掛け、今後もこのような「交流会」も積極的にやっていく予定です。次回の企画にご期待ください。

~2012-2013年活動履歴~

2012年1~2月	支援物資の収集・仕分け・輸送
2012年10月	カンボジア文化交流会実施 (10/6 大阪校 ・ 10/7 福岡校 ・ 10/20 新宿校)
	スタッフ2名がカンボジア訪問 (現地交流会の実施)
2013年1~3月	支援物資の収集・仕分け・輸送 (予定)



【カンボジア現地レポート】

カンボジアの朝は4時に始まった

朝、4時すぎ。カンボジアのプレイベン州にある「カンボジア・日本友好学園」の寮生は、日の出と共に井戸に集まり、夕食の片付けなど、家事一切を自分たちでこなし、7時から始まる学校の前、6時から塾に通うため寮をあとにします。

電気が開通したばかり。電気が高いため、夜は闇。太陽をはじめ、自然と共に生活している事に感じます。



恵まれた環境の寮 (井戸付)



生徒が住む小屋

カンボジアの憲法では、「9年間の無償義務教育を受ける権利を有する」とし、日本同様6歳から14歳が義務教育の期間。一般的な小中学校は2部制(入れ替わり)で、午前の授業は7時、午後は2時。1日3〜4時間しか授業はありません。あとは働き手となり家族を支えています。そんな中でも中学校の純就学率は、なんと35%。

実際、友好学園の生徒に聞いてみると「7人兄弟です。兄弟のうち僕だけが学校に通い勉強させてもらっています。もったいないです。貧乏で3人しか学校に通っていません。貧しいから。」と。両親は、子どもの中から代表として学校に行かせる子を決めるのだと通訳の方も教えてくださいました。今を生きるため、



友好学園授業風景

勉強を断念せねばならない子どもが多いのが現状です。

自分が知識を得れば国は変わっていく

生徒の1人、プティさんは、「ぼくは貧しいからこそ勉強したいと両親を説得した。こうやって両親から希望をもらえて嬉しい。両親・家族が支えてくれているから学べる。」「苦しくても成功し家族を助きたい。田舎で米を作っているけど何も変れない。今は何もできないけど、勉強すれば知識が得られ、家族を助け、自分の田舎を変えたり、カンボジアをよくする事ができるようになる。」「友人とよく話すのは、もし自分たちが何も学ばなくて、知識もなかったら、国はいつまでたっても変わらないという事。自分を始め、知識を得る人が増えていいたら、必ず国は変わっていく。」「貧しくて努力さえしてあげれば必ず報われる。苦しいけど、人は苦しい事が必要で成功できないと確信している。友達も多く勉強をやめていった。でも私は、今のままでは両親を本当に助けられないと思う。家族がどんな状況になっても学ぶことはやめないと決心している。」「真剣なまなざしで語ってくれました。

彼の夢を聞いてみると「勉強して優秀な成績を修め、もし、奨学金がもらえたら、大学で日本語の勉強をして日本の会社に勤めたい。給料がもらえ家族を助けられるし、経済大国である日本のことを学び発展を知りたい。そしてカンボジアがどうしていいか、

かを考え、カンボジアの発展に貢献したい。奨学金がもらえなかったら、農業を学び村の農業を変えるか、銀行関係の仕事や学び、村の近くの銀行で働き、村の発展に貢献したい。」と語ってくれました。

また、友好学園の卒業生ソットさんも、「私の田舎には医者がない。ケガや病気で苦しむ人に村では何もできない。だから私は一生懸命勉強して、奨学金を得、プノンペンで医学を学んでいます。医者になって田舎を助けたい」と語ってくれました。

知識のなさが大量虐殺という悲劇を招いた

100万人以上の民衆が犠牲になったポル・ポト支配下の大量虐殺。その殺戮現場キリングフィールドの淵に立たされたがらも、逃走に成功し、九死に一生を得たコン・ボーン氏が、



コン・ボーンさん

「悲劇の原因は教育のない事」とコン・ボーンさんは悲しげな表情で語ります。「カンボジアは昔から知識をもった人が少なく、85%といわれる農民は字も読めなかった。そこをポル・ポト幹部は利用した。いかに農民に対し、残りの15%の知識を持つ人に反感を持たせるか、そういうことを教え込んだ。聞くところによると、小さな5・6歳の子に殺しの練習を仕込んだ。自分の両親も殺せるよう教育した。親は自分を生んだが、恩があるとは関係ないと教えた。」

「もし知識があれば、あの殺戮がどういうことか解り、多くの人が殺されはしなかった。だから私は教育が大事だと思う。知識がない人は色々な事

が言われるままになってしまう。だからこそ私は、田舎に学校をつくった。正しい事が何なのか文字を学んで知って欲しい。」「そして、自分の生活を変え、社会を変えられる人を育てるため、残りの人生は教育に捧げていきたい。」と。

友好学園卒業生でプノンペンの大学で学んでいるダネイさんも「家族みなこの時代を経験した。誰も殺されなかったのはとても幸運なこと。」と。親戚で殺戮にあつた方も話してくれたその表情に、カンボジアでは過去の歴史ではなく、今なお、皆それをむねに未来を築こうとしている事を感じました。

キリングフィールドの写真

支援を通して教わったこと

私たちが学ぶのは、知識を得るためではなく、得た知識を使うため。世論に流されず、自分の軸で判断できるようにするためなのだと感じました。

例えば、原発問題、地球温暖化の問題、TPP問題・・・学んだ知識を元に自分ではどう考えるのか。

日本語・英語などの言語を学び、今の足元につながる自国・他国の歴史を学び、現象の理由やつながりを地理で学び、しくみや原理を科学で学び、その根拠を数学で知ることさえできるのだと。

考えるための材料は揃っているのに自分自身で考える事の重要性を、カンボジアから教えてもらいました。

カンボジアへの支援を通して、とても多くのことを気づき学ばせてもらっています。そのような気づきを少しでも伝えていけたらと思っています。



おまけ、人気スナック「虫」

『すべての子に学ぶチャンス』～カンボジアの子どもたちへの教育支援～
 ちょっと字を書いただけの使いかけのノートや、もう使わないえんぴつ・ボールペンはありますか？
 捨てるのは「もったいない」けど自分は使わないと感じたモノを提供してください。
 ◆ 収集場所: 各校舎窓口 2013年2月19日(火)まで
 ◆ 郵送先: 〒467-0807 名古屋瑞穂区駒場町4-1
 河合塾 メディア教育教材開発部 気付「カンボジア支援物資」
 TEL 052-852-6050 ※問合せ先とは異なります。 3月1日(金)必着
 ※詳細は各校舎に掲示してあるポスターまたはチラシで確認してください。
 主催: 河合塾グループ社会貢献活動「カンボジア教育支援活動グループ」
<http://www.kawaijuku.jp/sr/contribution/cambodia/>

【会計報告】
 <募金収入>
 2011年度 278,732円
 2012年度(12月分まで) 243,222円
 <支出>
 2012年10月 ケムラさん招聘(渡航費など) 187,670円

温かいご支援、ありがとうございました！！